

2022年度 再生医療知財セミナー

アカデミア・シーズの受け取り方 － 企業研究者の立場から

2022年09月20日

第一三共（株）細胞治療研究所

小清水 右一

『アカデミア・シーズの受け取り方 －企業研究者の立場から』

- ✓ 長年、アカデミアとの共同研究に携わっているが、
日々悩むことばかり 悪戦苦闘
- ✓ 結果として、実用化に至らない案件が
死屍累々 『金喰い虫』?
- ✓ つたない経験と情報、
－^(いち)民間企業研究者が思うことを共有します



本発表内容は**個人の見解・意見**であり、所属企業や団体等を代表するものではありません。

また、各事例は特定の団体や案件を示すものではなく、ごく**一般的な例示**であることをご承知おきください。

産学連携による知財形成に必要なもの

- 良いシーズと良い研究開発能力（当たり前）
- 共同研究実施のための良いシステム／体制
- 知財形成のための良いシステム／体制
- 知財に関する（双方の）学習・教育・啓蒙
- 知財に関する意識・期待・位置付け（意味合い）の共有化



このギャップが大きな問題点では？

シーズを受け取る段階、お付き合いの早い段階で
ギャップ解消が必要

ギャップの一例

アカデミア側



良いシーズを見つけた



実用化すべき



企業と組もう！



企業側



先生（大学）のシーズは有望



実用化すべき



共同研究させていただこう！

- ・ 産学連携で実用化 → お金が儲かる
- ・ アカデミアではできない産業化
- ・ 研究費確保
→ 自身の（目的外）研究の発展
- ・ 特許出願で成果獲得
→ 大学や官へのアピール

- ・ 産学連携で実用化 → お金が儲かる
- ・ 企業ではできない（基礎）研究
- ・ 新規シーズ／技術へのアクセス
→ “先物買い” “唾付け”
- ・ 社内ノルマの達成、業績アピール

ギャップの一例

企業と組もう！

既に特許出願済み

早く実用化に進もう！

そんな仕事はしたくない
それは企業側のタスク

ちゃんと評価しているのか？
企業側にやる気はあるのか？



共同研究させていただこう！

本当に“良い”特許？
抜けている点や
抑えるべき点がある

もっと基礎・周辺を固めましょう

将来的な産業化に耐え得る
特許になっていない
まだ研究開発の初期段階で
将来性がまだ見えない
“不適切な”特許出願は結局、
自分の首を絞める



自分の首を絞める出願（例）

構成要件 A + B + C の特許

A + B + C → 侵害

A + B + C + D → 侵害

D (+E+F) → 侵害にならない

A + B → 侵害にならない

別の**競合特許**として
成立する可能性あり

- ※ 他者に“A + B”特許を出願されると、命取り
- ※ 自分で“D (+E+F)”を見出しても、補正期間を過ぎると権利化できない可能性もある（進歩性の観点から）
- ※ “D (+E+F)”の重要性や可能性は、**知財担当者側が適切に評価・予測できない場合も多い** → **発明者 & 受け取る企業側研究者の責任範囲**

自分の首を絞める出願（例）

構成要件 A + B + C の特許

A + B + C → 侵害

A + B + C + D → 侵害

D (+ E + F) → 侵害にならない

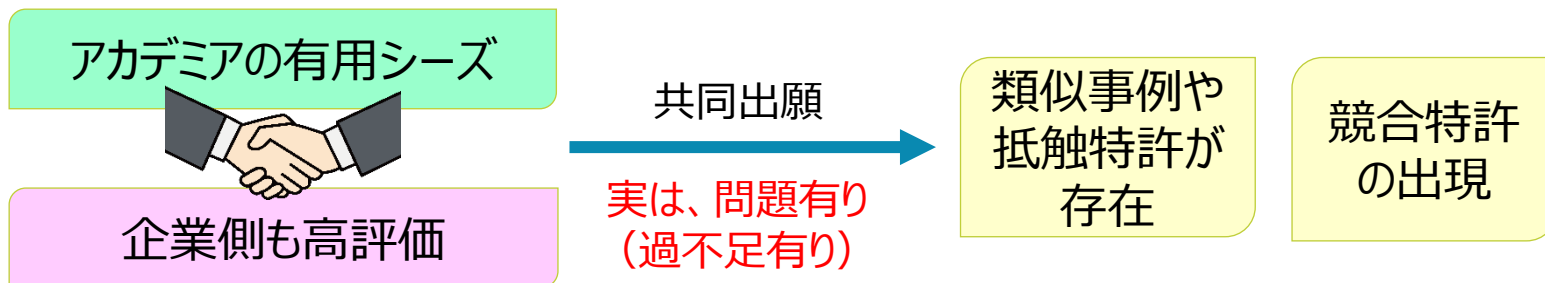
A + B → 侵害にならない

別の競合特許として
成立する可能性あり

※ 特許出願は『狭すぎ』でも『広すぎ』でも、ともに将来に禍根を残すことに

※ 事前・事後の妙策は（ほぼ）無い、との認識。シードの完成度と先駆性、かけられるリソース（人・金・時間）次第。

特許出願後の一事例



〔企業側〕

元の出願（特許）に問題が発生しました！



先行例や競合特許を回避するため、研究や試験を追加して新たな特許を作りましょう。

それでは、十分な権利範囲が確保できず、
実用化・事業化は難しくなります。

権利化が危うい現況では、追加のリソース
(人・金) も捻出できません。



〔アカデミア側〕

なぜ、元の特許でダメなのか？
事前に分からなかったのか？



権利化や実用化は企業側の仕事。

追加の研究や試験はできない！
(人・金・時間&興味)



アカデミア側に知っておいていただきたいこと

企業 (研究者)は、

- ✓ 必ずしも、特許や知財について詳しく知っているわけではない
- ✓ 特許出願／権利化や実用化の経験が豊富なわけではない
- ✓ 初期段階の研究シーズの権利化や実用化の可能性を見通すことは、とても困難
- ✓ リソース (人、金) が潤沢なわけではない
- ✓ 多くの案件を抱えており、社内調整や優先順位付けが必要
- ✓ いつまでも同じ会社／部署／ポジションにいるわけではない！

『長いお付き合い』は対個人ではなく、**対会社**

企業側が心がけておきたいこと

- アカデミア (研究者、知財担当者)は、
 - ✓ 必ずしも、特許や知財について詳しく知っているわけではない
 - ✓ 特許出願／権利化や実用化の経験が豊富なわけではない
 - ✓ いつまでも同じ大学／研究室／ポジションにいるわけではない
- 研究シーズの権利化に関し、『過不足の無い出願』を意識
(言わずもがな、but とても困難)
- シーズの権利化・実用化までには、長い時間と労力が必要
→ 妙策は無いが、あえて言えば、特許の補正や追加特許の出願・権利化等により、『特許群を重厚にする』

自戒を込めて



Thank you for your kind attention.

If you have any questions & comments after this seminar,
please send me an email.

address: koshimizu.uichi.jp@daiichisankyo.co.jp